本を選ぶ

NO.491 2026年（令和8年）4月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

https://www.las2005.com

本社 〒114-0002 東京都北区王子4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぽわん>椅子はおもしろい 再

●司書の眼（第61回）
－結果、オーライ！－

ろん・ぽわん

椅子はおもしろい 再

民藝運動を率いた柳宗悦らは白樺派の雑誌にも関わり、海外の新しい美術家を積極的に紹介した。ゴッホを日本に初めて紹介したのも『白樺』だったとされる。人間国宝・木工芸家の黒田辰秋が23歳の時に初めてゴッホを知ったのも当時の『白樺』（1912年第3巻11号）のゴッホ特集でだった。

そのゴッホの『アルルの部屋』に描かれている素朴な椅子こそがゴッホの椅子との出会いである。以来「日本人が制作する、日本のための椅子」を自らのテーマに掲げ続けていたらしい。（『民藝』（177）／編集委員会 編／日本民藝協会／1967年9月／https://dl.ndl.go.jp/pid/7931953）

その後、折しも東京オリンピックが行われた1964年に東京の日本橋三越百貨店でスペイン民芸展が開催され、大量のゴッホの椅子も輸入して販売した。ここには陶芸家の濱田庄司が関わっていた。濱田もまた「ゴッホの椅子」を追い続けている一人だったのだ。しかしながら濱田が最初に「ゴッホの椅子」と呼んだわけではないようだ。「スペインの田舎の椅子」などと呼んだらしい。（『ゴッホの椅子：人間国宝・黒田辰秋が愛した椅子。その魅力や歴史、作り方に迫る』久津輪 雅 著／B5変形判／誠文堂新光社／2016年）

もちろんフランスでもなければ、ゴッホその人に由来する椅子でもない。『アルルの部屋』に自分が描きこんだ粗末な椅子を「ゴッホの椅子」と日本で呼ばれているなどゴッホ本人は全く知らない話だろう。スペインの片田舎で作られている同じスタイルの素朴な椅子である。ゴッホの絵に登場する椅子を職人たちはせいぜい30分という驚異的な速さで1脚を組み上げる。

濱田も熱心にこのゴッホの椅子を追い求めて、スペインのグァディスという小さな村にまで出掛け、ついにその生産現場にたどり着く。三越での展示販売は好評で、スペインなど西洋の民芸品5000点を輸入し4500点が売れたそうだ。

濱田のすすめで三越を訪れた木工家の早川謙之輔は2脚を買って帰った。当時、黒田の仕事を手伝っていた早川は黒田に1脚譲れと執拗に迫られたと自著に書いている。（『黒田辰秋 木工の先達に学ぶ』早川謙之輔 著／新潮社／2000）

なぜそれほどまでに民芸品である「ゴッホの椅子」に惹きつけられるのか、建築家の中村好文が言い当てている。「もしかりに『椅子ってなんだろう』と問われたら、言葉で説明するかわりにこの〈ゴッホの椅子〉を黙って差しだしたい。『椅子の祖型』というか、『椅子らしい椅子』といえばよいのか。ここには椅子のスピリットが宿っているような気がするから。」（『芸術新潮』53(12)（通号636）「特集 建築家・中村好文と考える意中の家具；一番掛けよい椅子ないか」／2002年12月号）

これ以上でも以下でもない。（埜村太郎）

司書の眼 第61回

―― 結果、オーライ！――

鷹野　祐子

２月に家族とオーストラリアのケアンズへ行った。何十年ぶりかの海外旅行であり、正直なところ少しばかりの不安と、それ以上の期待を抱えての出発だった。そもそも今回の旅行計画に、家族はあまり乗り気ではなかったし、近場のシンガポールに行こうと思っていたら、「職場の人も同じ時に行くらしい。むこうであったら嫌だ。」ということで、もう少し足を伸ばしてケアンズになった。オーストラリアとの時差は少ないとはいえ、飛行機で７時間。「遠いし準備も大変そうだし、わざわざ海外に行かなくてもよいのではないか」と、家族は出発直前まで不満を口にしていた。しかし海外に行くなら今、という直感めいたものに背中を押され決行した。今振り返ればその判断は悪くなかったどころか、かなり時期的に良い選択であったと思うのである。ＧＷまで先延ばししなくてよかった。帰ってきてみれば、結果オーライ、いや、むしろ「行ってよかったね」と何度も思い出を語る旅となった。

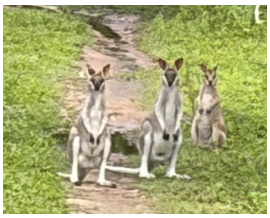
野良ワラビーに野良ワラルー

旅の行程は、いわゆるケアンズ王道観光コースで、まず訪れたのは、世界遺産グレートバリアリーフに囲まれたグリーン島（Green Island）である。ケアンズの町中から船で１時間ほど行くだけで、海の色は驚くほど澄んでおり、シュノーケリングをすると腰くらいの深さのところでも目の前を小さな魚たちが泳いでいる。波も穏やかで、遠浅の海岸には海亀やサメもきていた。砂浜のカラッとした空気の下でパラソルをレンタルしのんびりと過ごした。時間の進み方がゆっくりになったような気もしたが、滞在時間６時間ほどで最終の船が出港する、ちょっと忙しい海水浴であった。

今回はオーストラリアということで、現地特有の動物も旅の楽しみの一つであった。オーストラリアと言えば有袋類である。多摩動物公園のコアラはガラスの向こう側。そしていつも寝ている。コアラを抱っこ、というのは春節時期ということもあり大混雑だったので、コアラと朝食ツアーに参加する。コアラを間近で見て触るという体験は、予想以上に癒やされるものであった。係員の方に連れられて、ゆったりとした動きで木につかまっている様子は、見ているこちらまでのんびりした気持ちにさせる。そして道端で野生のワラビーに出会ったときは、思わず「おお」と声が出たのである。野良ネコならぬ野良ワラビー。自然の中で生きている動物が、日本では希少な種類が地元ではこんなにも身近に感じられるのかと少し感動した。ワラビー、これはカンガルーを少し小さくしたような動物で、動きが軽やかである。

カンガルーはやはり存在感が違う。体も大きく、立ち上がる姿には力強さがある。動物園ではカンガルーがうろうろと歩いている柵の中に一緒に入れるのだが、カンガルーはしっぽが長くしっかりしていて「堂々たる安定感」がある。しっぽの筋肉量が多く、骨も長くしっかりしているので、尾を「第三の脚」のように使って立ち上がれるのだそうだ。場内で２頭がけんかをしている場面に遭遇したが、立ち上がると２ｍくらいになり、にらみ合う力強さは想像以上で、互いに前足で押し合う様子は人間の格闘技のように緊張感を帯びていて怖かった。そして、ワラビーとカンガルーの中間に位置するのが、ワラルーという動物。初めて名前を聞いたが、こちらも野良ワラルーがその辺をうろうろと闊歩し生活と共存していた。

野良ワラビー
お腹のポケットには赤ちゃんが見える



野良ワラルー

不死鳥のようなユーカリ

オプショナルツアーは現地ガイドさんの車で移動したが、特に印象に残ったのは、観光地そのものというよりも、むしろ何気ない車窓からの風景だった。

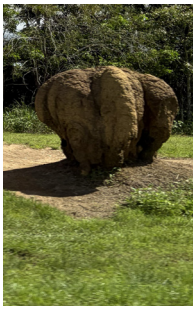
例えば、ケアンズの電柱はユーカリの木でできているそうだ。実際に見てみると、ユーカリの電柱は普段見慣れているコンクリートの電柱と同じようにまっすぐ立っている。日本の腐らないように赤く焼いた木の電柱はもうなかなか見なくなったが、ケアンズではユーカリの木製電柱が現役なのだと感心した。ユーカリはオーストラリア固有の植物で、約700種以上が知られている。成長が早く、比較的まっすぐに伸びるため、長い柱材として利用しやすいそうだ。また、木材としての強度や耐久性にも優れており、適切に処理すれば屋外で長期間使用することが可能である。わざわざ重く加工に手間のかかるコンクリートを使うよりも、現地で容易に入手できる木材を活用するほうが合理的であり、環境の面でも優れているのだろう。

さらに興味深いのは、ユーカリのもつ性質である。オーストラリアでは、しばしば森林火災が起こる。ユーカリは葉にオイルを含み、空気中に気化させるが、このオイルは可燃性が高く、結果として森林火災が周期的に発生する。この火災で周囲の植物は焼き尽くされるが、ユーカリにとってそれは必ずしも不幸な出来事ではなく、むしろユーカリはその環境で生きる術を身につけてきた。幹を覆う樹皮が厚く、外側が焼けても内部までは簡単に熱が届かない構造、また地上部分が焼けても幹の内部や根元が残っていれば、そこから新たな芽を出すことができるのだ。まるでフォークス（不死鳥）のように、焼け跡から自分だけよみがえるのである。

さらに、ユーカリの中には強い熱を受けることで初めて種子を放出する種類があるそうだ。普段は閉じたままの殻が火の熱によって開き種が地面へと落ちる。火災で周囲の植物がいなくなり光が十分に届くようになったとき、ゆうゆうと育っていくのである。なんともユーカリは火事場泥棒的な植物なのである。

小さな昆虫が作る巨大構造物

さらに驚いたのは、畑の端には大きな蟻塚があちこちにあった。車で走っていると、バナナやサトウキビの畑の中に、本の中でしか見たことないような２メートルくらいあろうかという蟻塚がごろごろとある。最初「この茶色い小山は何だろう」と思ったが、よく見ると立派な構造物のようで、思わずじっと観察してしまった。雨が少ないため壊れにくく、大きく成長するという。小さな蟻がこれだけのものを作るのかと思うとかなり感心したが、うっかり蟻塚を壊して蟻に囲まれる、というようなインディ・ジョーンズの映画のシーンを思い出してちょっと鳥肌もたった。



オーストラリアの土は
鉄分が多く、赤茶けている

オーストラリアの時間はゆったりと

ケアンズは町全体の雰囲気もよく、雨季だったので、浜にワニが来るから遊泳禁止となっていたものの、海岸線には無料のプールや遊び場が点在し、治安は良く、人々もどこか穏やかである。ケアンズの人々の一日の始まりはとても早く、早朝カフェで友達と会い、それから仕事に行くという。海岸通り沿いのカフェには、朝早くから人が集まり、コーヒーを片手にゆったりとした時間を過ごしている。そして、仕事も４時過ぎにはおわり、早く家に帰って物価も高いからか外食はあまりしないのだそうだ。海外ブランドが軒を連ねる大型ショッピングモールも５時台には閉店してしまい、開いているのはアジア系のナイトマーケットや屋台。食事をするレストランも夜が早い。こんなゆとりのある時間帯の生活に魅力を感じて、ワーキングホリデーやオーストラリアへ移住する人が多いという。町もそこそこきれいで旅行者としてはとても安心できる環境であった。危なそうなところに立ち寄らなかったということもあるが、公共バスが割と便利だったことと、配車サービスのUberでの移動がとても楽だった。アプリに行きたい場所を入力するだけで金額の交渉もなく配車される

というのは、慣れない土地では本当に助かる。ケアンズの海岸は遊歩道で移動できるし、買い物もUberのおかげで移動に困ることはほとんどなかった。

大自然にお邪魔します

ケアンズには、海だけでなく、もう一つ世界遺産がある。それは広大な熱帯雨林である。キュランダという地域の熱帯雨林は、何千万年という時間の中で形づくられ、アボリジニの人たちが今も暮らしている保護区になっている。他の地域では見られない多様な動植物がいて、数百種類の蝶が生息している。ケアンズの代表的な観光地になっているが、多くの人がこの地を訪れるのに利用するのがキュランダ鉄道である。かつては開拓物資輸送のために建設されたが、現在はケアンズ・セントラル・ステーション（セントラル・ステーションとは言うものの、ケアンズには日常使う鉄道がないから、となりのショッピングモールのほうが混んでいるし、場所も駐車場の脇にある！）から山あいの村キュランダまでを結ぶ観光鉄道である。車窓から見える景色は、まるで映画の一場面のようで、「世界の車窓から」という番組のオープニングになっていたこともある。深い緑に包まれた谷、切り立った岩肌、そして突然現れる美しい滝。列車はゆっくりと進み、その一つひとつを丁寧に見せてくれるのである。

もう一つのルートはスカイレールである。こちらはロープウェイで移動するため空から森が観察できるので、森の中にはいった感じが大きい。ゴンドラに乗り込み、ゆっくりと高度を上げていくと、視界いっぱいの緑の絨毯の上を滑るように進む。どこか現実離れしていて、うっかり事前にインストールしていた日本語ガイドアプリの再生を忘れてしまった。それでも、風に揺れる木々の動きや、遠くまで続く森の連なりを眺めていると、この場所がどれほど長い時間をかけて形づくられてきたのかを、肌感覚として理解できるような気がするのである。実際に途中駅で降りてその中に立つと、人間の小ささ、自然にお邪魔させてもらっていることを実感した。

スカイレールの建設は、「自然を壊さずに通る」ためにルート設計の段階から徹底して自然保護が優先された。通常のインフラ開発のように「まっすぐ最短距離で通す」という考え方を採用せず、地元の自然保護団体と相談して希少な植物や生態系への影響が最も少ないルートを選ぶことを最優先したという。

次にケーブルの支柱の建設は、通常であれば重機を使って森林を切り開きながら建設するところ、ヘリコプターを使って資材を運び、必要最小限の範囲だけを手作業で整備したらしい。これで森林の伐採を極限まで減らし、一本一本の木を個別に調査して、できる限り伐採を避けた。専門家が現地で調査を行い、どの木を残すべきかを細かく検討した結果、スカイレールの下には今でもほぼそのままの熱帯雨林が広がっている。また、地上を歩く動物だけでなく、樹上で生活する生き物たちの動線も意識されて、ゴンドラの高さも高めに設定し動物の移動を妨げないようにしているので、本当に森の上空を進んでいる気持ちがした。

キュランダの村に到着すると、そこはびっくりするくらい観光地であった。キュランダ鉄道やスカイレールではなくても、観光バスでも訪れることができるからか、土産物店やカフェが並び、人が行きかっている。また、一方で、森の中には第二次世界大戦中にアメリカ軍がこの地域に設置した軍事関連施設も残っている。「アーミーダック」と呼ばれる水陸両用の車で、ジャングルの中を縦横無尽に走り、そしてそのまま川へと入っていくという体験ができる。軍で兵士や物資を船から陸へ運ぶために使われ、戦時中は上陸作戦などで活躍した歴史があるという。見た目はどこか無骨であったが、キュランダの熱帯雨林では、世界中からきた観光客を乗せて、ジャングルの中を進みながら植物や動物の説明をし、やがてそのまま川へと入っていった。ごとごと走っていった車がジャボンと水面に浮かび、ゆっくりと進む感覚は独特で、おもしろい体験だった。

ジャングルに残るロマン

ケアンズ近郊には、もう一つ印象的な場所がある。昔スペインからきた移民の男が一つの大きな夢を実現させた。その男の名はホゼ・パロネラ。彼は小さいころ月明りの中で祖母が寝る前に話してくれるスペインのお城や貴族にまつわるおとぎ話が大好きだった。少年は「いつか自分の城をもつこと」という強い夢を抱いていたが、彼は貧しい家庭に生まれ、学校を早く退学した。だが、彼は夢を諦めることなく２０歳でケーキ職人として働き、経営と商法を学び、立派な青年となった。そんなとき、オーストラリアでの労働者の募集をみつけ、２６歳の時、移民としてやってきた。サトウキビ農園での過酷な労働を通じて資金を蓄え、十年以上にわたる努力の末、彼はついに美しい滝のある土地を購入し、理想の楽園づくりに着手した。ホゼはジャングルを切り開き、自ら石を積み上げ、城のような建造物や庭園、パロネラパークをつくったのである。

Do the hokey pokey

ホゼ・パロネラの残したパロネラパークは、日本人にはまだケアンズの観光地としてあまり知られていないけれど、時間があったら足を伸ばしてもらいたい場所である。美しい滝に見せられたホゼは、なんと滝を利用した北クイーンズランド初の水力発電所をつくってしまう。そして、アメリカ製のミラーボールが輝くダンスホールや映画館、スペイン料理が食べられるレストランやテニスコートなど、1940年代第一次世界大戦後の厳しい時代を生きてきた人々に安らぎと憩いを与える場所になったのだそうだ。

その後いろいろあって廃墟化していたところを、1993年にオーストラリアをキャンピングカーで旅をしていたエバンス夫妻が復興した。巷では「ラピュタの城」ともいわれているが公式発表ではないのでご注意を。このオプショナルツアーに連れて行ってくれたガイドさんが、実は私たちの隣の市出身だと教えてくれて、都立高校からスポーツ用品店、飲食業経由のオーストラリアで現地ツアーガイドをいう彼の生き方にも感銘を覚えた。そして帰りにつれていってくれたRoscoe's Pizza Placeというイタリアンレストランも、店員さんがフレンドリーで値段も高くなく、とてもおいしかったので紹介しておく。

（たかの　ゆうこ：医学系研究所図書室）

DMかたろぐ

ESTRELA

■2026年4月号
No.385/4月10日発行
B5判　64ページ
定価1,205円(税込)

〔特集〕カンボジアの最近の統計事情

■カンボジア国家統計局の最新事情／
西 文彦　（横浜市立大学大学院データサイエンス研究科 客員教授／（公財）統計情報研究開発センター 主任研究員）

■カンボジアの人口推移と生活環境改善
― カンボジアの人口センサス・中間年人口調査 ―／
廣畑 伸雄　（山口大学大学院技術経営研究科 教授）
福代 和宏　（山口大学大学院技術経営研究科 教授）

■カンボジアの経済成長と産業構造の変化／
― カンボジアの経済センサス ―
廣畑 伸雄　（山口大学大学院技術経営研究科 教授）
福代 和宏　（山口大学大学院技術経営研究科 教授）

公益財団法人 統計情報研究開発センター(Sinfonica)
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6　能楽書林ビル５階
TEL : 03-3234-7471　https://www.sinfonica.or.jp/

財政規律の比較政治経済学

制度的安定性，柔軟性，包摂性

横田正顕（東北大学教授）／編

財政規律と民主主義はどのように相互作用し，社会や政治にどのような影響を及ぼすのかを，国際比較を通じて解明する。財政規律の形成過程や現代的課題への応用，社会運動や政党政治への影響を分析し，財政規律の新たな意味を探る。A5判 定価 5,830円

災害と映像 防災ドラマは社会を救えるのか

安本真也（東京大学特任助教）／著

首都直下型大地震のリスクはかねてより指摘されている。にもかかわらず私たちの多くはその備えに万全を期しているとは言いがたい。そこに映像コンテンツの力はどのような効果を持ちうるのだろうか。大規模データとその検証を通し，その可能性を探る。A5判 定価 4,950円

有斐閣 東京都千代田区神田神保町2-17 https://www.yuhikaku.co.jp/ 価格は税込

P. リーヴィー、D.X. ハリス／田中恵理香 訳

フェミニスト研究ガイド

理論と実践をつなぐツールボックス
体系と方法。必携書。 4400円

倉田 剛

社会存在論

〈私たち〉の世界のあり方を問う哲学
分野の全貌に迫る。 3300円

勁草書房（けいそう） TEL 03-3814-6861 FAX 03-3814-6854 ＊価格税込

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1 https://www.keisoshobo.co.jp

失われた城郭の雄姿がCGでよみがえる!

総画像数 350点超!

2026年2月刊行既刊 B5判 180頁 ISBN：978-4-634-15261-8 C0092 定価2,200円(10%税込)

特別版 復元CG作画集 日本の城

山川出版社 監修 三浦正幸 作画 長尾美知子

〒101-0047 東京都千代田区内神田 1-13-13 https://www.yamakawa.co.jp/

日本理学書 新刊目録

2026 A５判／ 49頁

◆会員出版社９社の新刊、約140点を紹介。

◆科学一般／数学／物理学／化学／天文学・宇宙科学／地球科学・地学・地質学／生物科学・一般生物学／植物学・動物学の8部門に分類。

◆URL http://www.rigaku.gr.jp

日本理学書総目録刊行会

http://www.rigaku.gr.jp

実践! 児童発達支援ガイド

桑野恵介・館農幸恵［著］

エビデンスに基づく支援で質の向上を目指して

●定価2750円(税込) ●ISBN 978-4-535-98548-3

児童発達支援の現場で
質の高い支援を提供するには何をどうすればよいのか。
エビデンスに基づく具体的なアイデアが詰まった１冊。 5月中旬刊

カーボンニュートラルの経済分析

市場と地域

●予価3740円(税込)
ISBN 978-4-535-54063-7

大島堅一［編著］

日本はいかにして脱炭素、再エネへの転換を果たすか。 5月中旬刊

日本評論社 〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4 ☎03-3987-8621 https://www.nippyo.co.jp

総勢62名が語る、私の吉本隆明

豪華執筆陣による全集付録の
月報エッセイを一挙集約
四六判上製356頁／2750円

吉本隆明全集 月報集

晶文社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-11 Tel 03-3518-4940 https://www.shobunsha.co.jp/